開國起原

ゆ 5
2110
48

特
U 6
2110
48

宮内省圖書寮

開國起原巻四十七

慶應年間邦内之形勢一

慶應元年乙丑四月廿日伯耆守相渡
毛利大膳父子始而征伐之儀先般塚原但馬守ゟ手洗幹一郎
を以被仰出ハ趣意ニ付背ハ急速　御進發可ㇾ遊旨先達
て仰出ハ変事ニ付ハ様ちふ事分ハ付ち不容易企ニ趣ニ付更ま
悔悟ニ神妙ニ且　御所ゟ仰出ハ趣も有ニ旁　御征伐ハ
遊ハ旨ヲ仰出ハ依ニ五月十六日　御進發ハ遊ハ

去年長州征伐ニ付蒙大納言殿ニ惣督ト後ヲ仰付ル哀伏罪ト
深ク歎ニ付陣拂被ヲ哀愍ト関東ハ浅命ヲ仕次第ニ付ト少ク
今戦　御進発ハ征伐ニ付亦ト云同日抜前軍惣督ト仰付ル処
前方前殿ヲ方命ハ惣督ヲ職掌場ト次第ヲ立ニ付ヲ於
長州表議論区ニ成人心折合ヲ越依ト一度帰国仕諸侯
改度事願ハ以上

四月

成瀬隼人正

細川越中守ハ

海舟書屋

此度毛利大膳父子始為御征伐五月十六日
御進発ヲ趣旨ハ仰出ニ付ヲ被ヲ立ト趣ヲ方ニ其方儀
御先手先鋒被仰付ル間可ハ速勤ル
細川越中守家来美出ハ書付
此度　御進発ニ付越中守儀　御先手ト先鋒ヲ仰付ル事ト昨年ハ
仰付ル通海路下ノ関ヲ方ト赴ヲ心得ハ可ヲ宜ハ哉
一御軍令ハ度且国許出張仮合攻口并計入月限苦ト儀ヲ
御進発ト上ハ先京都ハ為　入ル儀亦ト京ハ大坂ハ迄　御窓夜ハ
哉ヲ方ヲ　御本陣ト儀ヲ駆ヲ通ト通振路ハヲ為　入ル儀ハ
ヲ哉

一 毎度も越中守様に軍の目付可さ差添に成

一 御進發且京都大坂之内　御着陣并に伺候為海に

御凱陣之義し勤向し後昨年に船達し通知心得に宜に成に成

一 出陣に合攻口等し儀に達に成に人数差出に上し昨年に船達し

通　御機嫌を外平常し勤向差扣に方に未心得に宜に成に成

右之通年伺に国許し義山海数百里隔る左に事故越中守義

知仕に上年伺に申し往返し為取に年伺に義し趣急速国許に

申達度年存に可無抜年願上に以上

細川越中守家来

青地源太左衛門

備為家し建白

毎度　御進發し義を毛利大膳始に容易企申し趣如少更に悔恨

し仲を之し趣を以　御伺代可に述吉年兼知に家非冬屋張前

大納言殿に惣督に命山陰山陽四国九州し侯伯を以て

御伺代申に家罪魁三老臣を始め謀し家臣共令刑戮悔悟

謝罪し寛恕に成に成に自於惣督寄手の列侯に内談判解兵し

成に成　相幕に成に言上申し至当し裁断可に仕に成

ら天下驚目展し意一應し裁許に成に仰出被又

御進發に越に限天下人心惑仕に成に成に素より捨置に難

海舟書屋

進取こそ可有古世に得せずして不容易企と而已を仰出られ事細に沃
柄ふ事業知らず人心ふ後に程なく何れに事存に在 市戒光を以
市伯代に後進令し長伯と有古世ふ為に作併人心奮励戰
爭事一に市戒に程こそ五年可中に事存に於長藩を非事に謝罪
浪士に市第ひ変ふ情慨憂愁に餘り決死窮鼠に勢に可来
や必然に理古世に奮発事一ふらさる軍を以憂愁に餘り決死
に兵に市当ひ戦勝敗ふ可有古世現当今に人心沸騰に時
勢一時に 徳川家に市ふ為且 皇国に紛乱を醸に後出来
も難事事存に恐多 神祖市鴻恩且先祖以来
市当家に忠勤市孝中義に天下知る所に古世人 市当家に

海舟書屋

市ふ為に市孝に業を携手倍就に心腐更に事古世ふ厳忌諱事に上に
何卒今後に伝代に義に暫古世ふ孫に進大中に長伯に名を
上立後に進市国是に為立 徳川家中興に古世ふ為に
拙事市に素ひ大猛父子事 對 朝幕悔悟謝罪に非
事古世に後に古世に上に恐市就伯に事古世大中に長伯
後仕奮励勤滅可仕に事存に在事事に私心に上に
後に事古世事平定長物に蕩に為以
皇国擾乱に結に事さに一且に市盛業却に古世後
実に市成可中に深憂に恵仕に変ひ
神祖累代に市鴻恩事後度に遂に微衷市心に以奉

獻上の後に内々に懇察し程伏の事希上の諚言

又四月　　松平備前守

越前家の建白

毛利大膳父子御征伐として　御進發の仰出の節松伐

大坂表に御待受仕度事類の変類し通り仰出慈有仕合

幸存の者に付昨秋以来し景況を以及愚考の変大膳父子

降伏謝罪し次第屋張前大納言殿より委細に及言上の

通に北上し大膳父子を始二州し内一所に幽し裁決とし

内々に御心得居の変今般仰出に大膳父子悔悟し

海舟書屋

御進發の仰出の節如何し内次第に於熟事計の生の元者父子

し遺責を以始末厳密に一同死守し勢に出成の事実し

容易事柄に天下し為に可然に付父子重罪し変

を以降命に御待受の上の余し前大納言殿より具に御申上

の事に内生の変事の助し一切内取揚も無し再發し

趣を以　御征伐に為及の義必御定算に為事の義に事

存の者昨年し変に事年来曾有し御大儀も

御成就を以及干戈鎮靜に可成次第に朝野も渝安

堵に帰の変又し大兵を動の義に必天下し乱階に依大名

と困窮萬民と怨嗟歎に以ふ一方事なきに地上の月朱を測し変
可生後も難計候恐　御家しの為ゆに成る成ふ堪恐懼奉
存候尚と様と尽愚考の変事　御上坂し上速
御上洛大僕父子始二州し所置
廟意御同公武の会和し裁決に成りしを奉干戈大猛
始二州し士民に至迄何様し遣責も無余儀甘受可仕と勿
論に天下し人心も静定に至可申と必無し儀ら事存候非事し
ち機会に乗ち為ち迅速　御征伐御成功し上
御上洛も近き当に事存候間御当惑に
朝廷ゆも先達以来無し　御上洛し沙汰に為ち左候に事柄

海舟書屋

義に〳〵ち左に大坂ら　御進発ら為ち左の日ち都合の事存候何
の事も　廟意御同し上ら　朝廷し　異ち事ら天下
し驚目ら中防長鎮壓し日運も可成に事存候長ら
の特拳し後ふら為ち左尚又再費殺伐し事実に紛弾し上
朝命も奉天下に参言して共に御征伐ら為ち左の〳〵御成功し
程も萬と疑可為の儀事存候実に地度し後し御名義し
西香　御家ら日奥慶も関係仕至事至大し日儀ら事存候
二月薩邸事言上に尚夢〳〵　御廟議ら成下の抵に事
至願の誠恐誠惶頓首謹言

四月　松平越前守

四月廿九日　勅使飛鳥井殿持来

上洛し書を追て　市汐落被為立に付て限て運びに相成

儀にて一可有しに得共緩急に寄自然天下の安危に係り助に付

精く速に用意相整　上洛可有之事

萬一上坂被　仰出の得共市情実に政道徹底に至て詮も

無之儀と深き

思召被為立に付先般より上洛之方被　仰出在先以

上坂其上　上洛に成も存候迄可為猶予事

海舟書屋

同年五月上納金し後酒井忠狩が寺社に達し書面

心覚書

今般の進　市進発の後実以恐入る次第に付多年太平し市易浮を

相離万民挙て尽力勿論し其僧侶社人といふとも其中に應じ用向

相勤　市国恩を可奉報し此時に乗じ近年内多端を接し市物

入も相続り相痛候　市進発に付て用途莫大し限り中にて

後に付て限り無之　市為下当て下寄寺社し勿論し品し多少を

可為分ち其に応じ一応取りて心底に程も相数一宗一派に

拘て一宗一派し規模も相立に書に付て心得を以て及び大

上納此一改て古内用途し内に加も相成ず申に付て

尤先達上納金成し未分金高し事に付此度し義に付こゝ
高し而容易の事柄に付平生し心高く離れ格別出精上納出来候
厚く含觸下さゝれ共方共公可申論に付係吏に付き益し手数
出無のこゝ而異国遠国し輩も態し呼出に而及申し中出候一度
右に自分共心得を以申論の事に付心得違等し振吏くゝ中通
度事

五月

別紙の論し趣旨に分配し向こゝ中達に付此度し義一下通り
而成の事柄に付多年蒙恩深に冥加し程出難必速に上納
出来可申哉し而こゝ納方心得し後左の中達に

海舟書屋

一 市府内に所在の寺院し向こゝ解脱に取集負担地名宗旨寺号
等出来候目録書出来納可申事
遠国に所在の寺社し向の料に支配者の不代官役所に
預役所に領主地頭役場へ出納方石以下し向知行所に
陣屋等し分に最寄の者に不代官役所に預役所し向こゝ出
納可申事
一 関八州に所在の寺社し向支最寄に支配役所領主地頭役場
等に上納方差支の分に出府し上自分共し向に出に出納の儀
又に慣成便宜を以江戸表支配役所領主地頭屋敷に向
出納の儀勝手次第に為すべき事

一附属之寺社ハ向遠国ハ多キ高次第寺ハ所ハ代役ハ
ハ須役所ハ万石已上銭多役場ハ内ニハ納間八形ハ多キ高
寄ニ右寺ハ所ハ代官ハ須所役場等ハ差文ハ数ヲ出
府シ上自分共内ニハ来ハ納ハ又ハ惟然便宜ヲ以寺院ヲ
解脱社人ヲ吉田白川及ハ役ヲ外出役所等ハ向ヲ
右ニ向ハ納ハ代務手次第ニ可ハ事
右ハ通可ハ心得ハ解脱又ハ寺行所ハ代官役所ハ須役ハ領
主地頭役場ハ納ハ又ハ差文ハ自分共方ハ差越ハ旅宿
向ハ中達書役ハ左上納ハ願ハ可成丈ハ差出ハ紛失
費等ハ無拠可ハ右ハ振酬下ハ向ハ早ハ通左一同

海舟書屋

御国恩ヲハ難期日ハ急務ハ用途ハ差加ハ成ハ拠函度ハ心得
ニハ上納可ハ事右通ハ改ハ自分ハ心度更通ハ改ハ取ハ可成
丈速ニ上納ハ第ハ拠ハ又ハ急度可ハ達ハ

丑五月

同断町奉行ハ五月二日申渡

組ハ世話急

名主共

近年海岸防禦ハ手当等ハ市中ハ西丸ハ度ハ等ハ上
ハ文年以来ハ度ハ　市上浦ハ外筆ハ雑差ハ用途ハ後ハ
拝柄尚又ハ役　寄進ハ代ハ莫大ハ入用高ハ融通

し為江坂共市料所百姓町人寺院等ニ五之内用ヲ仰付
旨ヲ仰出ニ付テハ市府内町人共ニ後ヲ
市城下ニ安住渡世ヲ続モ殊ニ格別蒙 市國恩ニ後ニ付テ
身ヲ家業ニ餘沢ヲ以安楽ニ暮ル迚聊モ市奉公ニ助ヲ不節徒
ナ事過ル方ヲ長ク勿神慮ニ有シ是ニテモ取違此度ヲ実以ヲ容
易ニ入用ニ付更ニ多限ニ應シ献ル内用可ニ勤旨ヲ示シ者
迄能ク申諭地主ヲ勿論地借ニモ有徐有シニ考ヲ中之次ヲ
名前取調成丈ケ金高ヲ進ル様可致ニ第一調義有ル様 私
情ニ拘ル候ヲ以ニ於テハ急度可及沙汰ル旨ヲ心得思名
立共ヲ方ヲ方ヲ中通路ニ出精ヲ勤ル様可致

海舟書屋

但此度ヲ仰付ル内用金ニ後ヲ来寅年ヨリ拾ヶ年賦ニ割合
内下ヲ戻ヲ成ル旨ヲ心得可申ル
前文同断 市城下ニ安住ヲ業政永続ル
市國恩ニ報ヲ雖生年ヲ内用金ヲ出又ヲ上納金ヲ献ル者
有シ以ヲ此度ニ義ヲ取違実以ヲ容易ニ入用ヲ助ニ付テ
餘澤ヲ以安楽ニ暮ル迚右様ニ内財節柄御ニ内ヲ云筋
モ内ヲ勤後ニ歩過ル長ク神慮ニ有シ其方共ヲ上向ヲ
厚ク義ヲ業ニ内ヲ冥利ニ復ヲ乗何様モ都合ヨシ
除立出精可致ヲ高ル内ニ出格ニ内賞誉モ可有
ニ成ル金高共納方ニ候ヲ町年寄共ヲ可申渡ル

右於町奉行根岸肥前守役宅同人中渡し

長州より嘆願書差出に付云

朝廷愈御機嫌能く為遊　御安産歓ふ斜事存ぜず去

私共中合上京仕周旋し上御事安

厳意存寄ぜず上の意ふ顧愚中重職方に存寄十分献言

仕の文無更共諫言申張既に事蒙

勅勘の上今度　大樹公長防為征伐ら遊下向に付ても

言用し私共長存命ぜず上の方ち

皇國并公儀等の為こふ区ら事存ぜず此度一同中合速に

海舟書屋

決戦し上討死可仕存寄こ方し出当家代し戦軍し御事

奏上ぜず家流こ内出ぜず此度内面事申上ぜず以上

閏五月　　長門宰相

毛利少将

閏五月長州家中へ触示ぜず書面

此度　大樹公進発し由然ん上ち只管遂謝罪申届方し上ち

大幸し至こ得ち萬一義引寄し義ち不得止事一戦可致

得ち欲迚謝伏ち之自然聞入寄し時ち長接方し度恢ぜず

拙身命可尽忠節ち偏こ願入ぜず我等ち忠節而已ち

ちゝ祖先ゝし忠節ニハ聞ふくも賴ゝ事

同月廿三日午刻從東海道　上洛即日參　内ニ條殿ゝ以九し
勅諚ゝり

朕欲召長門父子而不至者則伐之　朕欲召長門父子
汝紀而無違則誅之　朕欲召群藩汝滯京洛依衆言
之所歸誅伐之善乎撰汝退而以三者

同日於小御所西議列座從武家傳奏　御沙汰ゝ趣
山陵多年及荒蕪歟ゝ恐惟ゝ事ニ　思ハ召ゝ去文久二年
於大樹尊奉ゝ修補ゝ儀一切戸田越前守ゝ委任為同人

海舟書屋

代同姓大和守家來ゝ名連上京五畿内巡行ゝ委或ゝ田畑
蠶食又ゝ宮社堂宇民家等ニ令迷立不尊不敬頽破至極可及廢絶
ゝ処不失古例不謬真偽

神武天皇以後百有餘所ゝ　山陵遠ニ　御修補盛大成功既ニ
勅使參進ゝ上卒業之儀達　叡聞奏処畫　御宇ニ至
天祖以來連綿ゝ　皇統顯然　御尊奉ゝ道如立教千年
之荒廢一時ニ御修補　御追孝美大ゝ御懿德恭ゝ相輝ハ
段畢竟大樹之尊志忠義其ハ祖先偃武以來ゝ　御怠慢一旦
ニ御快然被為開　叡慮不斜御滿足　思召ゝ因之先代ゝ
舊功ゝも被　思召出前大政大臣秀忠公贈大政大臣家光公

神殿　御内慮被仰下候事

同日武家傳奏老中に達

山陵修補内用一手に被勤仰大樹公より戸田越前守に委任

有之候成年以来同姓大和守家来共召連御場所迄之

探索之上今般五畿内丹州及成功

勅使発遣之段　　御追孝之道も被立

厳慮不斜に就て之右茂蹟次第被顕表被仰　幕府宜

褒賞可有之との事に付　青蓮院殿下へ命ぜる事

去月廿八日長州家老より別紙書状写し通中越に右外国船

海舟書屋

下し関に碇泊し候に付　御再征之儀建白仕候毛頭異存無

就て者其以迷惑仕候段　何卒和業コンヒエル

に付後日成に付書付為心得指見に仰付下度事存候

此度乍恐急速事務に以上

五七月

小笠原大膳大夫家来
小笠原　甲斐

別紙

一に事後至上に各抵弥堅固可有成御勤珍重存候之今般

御再征　御再征之台命に仰出候従者之争之後に堅

外敵惑乱之変失達宇和島藩より内通之後者外国

事行紫田日向守度抜神奈川蘭人直接之趣に有議

に一決し去歳に孰れも去冬甚以て得さる所に折柄閏五月廿四日
和蘭コンシエル下し関碇泊に付役方より去政應接及談問の処
討長し彩さ全く外国恥当港滞泊等し事を以小倉藩か
毎度幕府に対中立の趣か起り右中立し書面徳川家老より請取
該一覧に之書面持合の中に決て去連ると去答に付右
し次第を以貴藩に及急合の旨武と去年の変勿論の苦
由去答に付ても弊藩に再征し後も変藩に中立ら
仰出の義決て去伺の変一昨年上京に止様夫も一已
私闘し姿と去成尚去秋に国京師変動し後も苦し に得
止止戦し政取半に付右後夫恥通りし義鉄之品も

海舟書屋

去後不の行世間噂を失に の不為毛氏を生の変於変藩此等
大義と去隙りの事件を拵急に 作立次第熟及落忘の第一
確証し後善し に取半方も有し に有善し後速に に答も
成下度波の頼の右為可得の意如此の生の恐惶謹言

毛利筑前名判
志道安房名判
毛利出雲名判

小笠原大膳大夫様
内家老中 様

拙程小笠原分長州領海に和蘭軍艦通りし義長州

方今宸襟者右軍艦に未越彼と恭萬し淡粥なし越し由
屆なしに付外國事務紫四日向守金港に出張右し事實
同國公使に紙問なしに対話左し通

日向守

此程小笠原家より貴國軍艦長州領海通行し義長藩し者
事軍艦に未越行なし後欲懇に對話なし外し越内し屆出に
付閣老方心配之段右し事実面會に委敬義に振に中少
に付右し通實義知に付し長藩意に中少度事に

彼方

内密し趣實事に未達し共程委細し義右軍艦示組

海舟書屋

し者に義知仕に長州公に対し談粥一し日本政府し為に豆
事而已に驚歎仕り其国とし舊来に恭親に付信義和
守長州人し中ゆに始末し何も浮説同様少流し仕に為し
決に内心配之日中振事存に拠に し始末一し段に ゆ上事

日向守

右振心得吳に し千萬奉存に然右振し義し以来し中ゆに

振頼入に

彼方

義知仕に猶一事中上共間長州人金し西洋人に対接仕り
高杉に素組横濱表に未越各國公使共に何なし後欲

面後仕ル振義知仕ル事ニ私方ヘモ可ト致義ニ存ル哉何者
ニ候哉私方ヘモ相談ニ及ハ右ニ義知ニハ
日向守
今日初ニ政義知ハ
彼方
又一事ハ上ハ長州公ハ西洋各國ニ使義差立ル振義知仕ル
右ニ付少又ハ
日向守
左ニ風説ニ少又ハ仕ル事實ニ初ニ政義知ハ右使節ニ者何れ
ニ私ヘ系組ニ致ル哉義知ハ
彼方
私考ヘハ高松ニ頼香港ニ致同所ニ飛御船ニ者ニ
付ニ系組各國ヘ渡ニ俗ニ存ル
日向守
右使義ニ中濱ル後各國政府ニ右談ニ可申哉ニ使ニ
ハ何ニ思ル哉
彼方
各國政府モ方今ニ御國政府ニ條約ニ結ル上ニ後ニ自日本
諸侯ニ又ハ和親ニ仕ル事ニ信義ニ外ル後ニ自ニ右様ニ義
決ニ難ク後ニ私考ヘ中ル

海舟書屋

此時雜話有し退散

七月廿五日和泉守相渡

方今武備し儀に付話も有しに折柄に付調練場為ら雲城

し面に羽織袴に袴し侍来出る若退出ら武士殿中

羽織袴に袴に若し事

九月十四日前同人相渡

横浜港内に碇泊し外國船振海へ出船の趣し要

皇都に程近し後に付嚴重に止稜し及議論の為ち既に出帆

海舟書屋

後に右に 市左衛門に付彼地に中立の事件有し由別紙異

条も無之に相当の地限面に可相達旨

九月十五日二本橋蒸氣軍艦佛蘭西國船名キンシヤン天保

山沖碇泊船に付町奉行支配向し来立會之也来意相尋

度事に付面會致度旨中少に付松平大隅守井上主水正

大坂町奉行為立合来松左京亮付支配向せ右船へ相越

佛國カシヨン英國シーボルト、アレキサンドルに面會應接左し

通

大隅守

今度当地に為談の上何為し用向に付

カシヨン

ハ老中方ハ西舎中上ハ阿部豐後守様ハ立坂より

大隅守

豐後守ハ上京ハ政ハ

カシヨン

松平周防守様ハ立坂ハ

大隅守

同人も上京政居ハ用向ハ無之ハ通り兼知政度ハ

カシヨン

ハ諸中上度ハ格ハ老才方ハ西舎ハ上中上ハ指命を受ハ故ハ

海舟書屋

故ハ氣ハ毒ハ話然中上ハ老才ハ誰様ハ立坂ハ

大隅守

小笠原壱岐守立坂ハ

カシヨン

ハ〻壱岐守様ハ西舎頻度ハ尤ハ達ハ歌ハ者ハ和ハ多人

外ニ英國ハ亞米利加人名代マリタリソン阿蘭陀國アースソン

都合四人ハ中ハ

大隅守

ハ引取一應中ハ上從可及挨拶ハ兼知ハ上ハ天保山最

寄ハ壱岐守出張可致ハ存ハ者中人ハ迄ハ行ハ様可ハ致ハ

カシヨン

否迚未待に拠可成に乍去之儀上陸改度の旨薬内し去之人

内殘可申下に

大隅守

應接不と上陸の苦に薬内し去殘置可申に

カシヨン

應接中に場所を何れこに代

大隅守

天保山最寄に御意し家屋有しの旨右へ薬内可申に

カシヨン

海舟書屋

山口駿河守 外国奉行 と当州当地へ参りの

大隅守

当時立板こに

カシヨン

幾日位大坂に参りの

大隅守

五日程以前に参り申に

カシヨン

小笠原刑部 白山栄五郎 と立板この

大隅守

刑部ヶ丘坂栄之助ヶ上京致ル

カシヨン

可ル成ヶ者改寄様ヘ之面倉為ニ駿河ヶ及刑部ヶ及ル面倉

ヶ方都合宜敷ル

大隅ヶ

駿河ヶ刑部ヶ可申ヶル

カシヨン

大君何日頃ヶ出上京ル成ル哉

大隅ヶ

昨十六日上京ヶ成ル

海舟書屋

アレキサンドル

中国毛利ヶ未ヶ降参ヲ致ル

カシヨン

此度彼地ヶ移振為一見下ヶ関ヶ及致ル上達ヶ降参ヲ致ル

取ヶ度ル事ヶ及ヒヶ政府ヶ多忙ヶ各国ヶ ヶ甚ヲ異ル

大隅ヶ

未ヶ降参ヲ致ル者ヶ期限ヶ日数ヶ降参ヲ致ル

順序ヶ以来異ヶ取扱ル

右ヶ一同引取ル事

佛蘭西公使し書翰

此度集会様方へ渡ス面時可議ス大事件ニ付吾藩ス支配頭カシヨンヲ中来ニ先ス趣意を逐一中述ル様中付ル能ク之同人演述中ス第一中篤為も可有ス哉と心附別紙ス通則書取を以ス上ル熟覽し上可然ス存ス可ス仰望ル以上

慶應元丑九月　　佛蘭西全権ミニストル

市老中様

口達書

佛蘭西全権ミニストル、レオンロセス中上ル吾改有

大君殿下ニ於て長州の重罪を猶張ル事更よ趣意を知

海舟書屋

大君殿下ハ於て今日之急度ス罪を負唯彼ス自過て降参ス為を待迄ス日数を費給ふ為ス今ハ為ス之ス使ス或ス偽り降参の約定を中立或ス餘人立入て終ニ　大君殿下の出進愛徒事ニ可成哉と其頃ス此事を掛念して推参政ル抑国民を哀憐ス事専ら人君の可務と以ス仮　天子ス預ス先祖ス受嗣不の天下泰平を乱ス八仁心却て不仁ス為ル　傍方今日本の形勢を考ス上ハ　天子の叡意の不出次ス非儀ス謀反あり　貴国の泰平ス禍ス為ス者を ふ外此支条ス あらん乎国政を委任せられし事ス九八世界の変を尽て時宜ス従ふ為ス各国と交易條約を取結ふ事ス素ス條約取結ふ事ハ日本ス於ス　天子及諸侯

方も政府と同意ニ成世を却て而已を憂し擾乱を醸ス〻既ニ政府
ニ嘗て内乱を為ス事あり逆徒を日本政府ニ於て沽券方ニ
屈ハ各国ハ之を逆徒を撃んと議定ス期ニ及て
貴政府ハ何制ふも可後熟中英吉利政府の為を
考ふニ交易を主らとして自己の利害のみを先とし速ニ将軍を生し
徒の心　大君を最早ニ実ニ専鎖港の思ふんと思い居る処ニ
薩州長州の大名英吉利ハ密ニ使者を遣て何州とも二ヶ国ニ
於て開港可致の存意を頼ミ加ニ却て諸大名と外国と睦く交る
よいと政府のミ鎖港の志あると英の政府深く将ハ居の右の事
実を　貴政府ニ於ても未ハ将ハ為ス右を某為と只定ス事

海舟書屋

あるて新中の如ニ英の公使を生ずの将来を時ス為め上坂して右の実
否を自ら辨明致さん存意の旨を過月某熟海ニ於て山口駿河
守栗本瀬兵衛を以　大君殿下を何れも武威を振ひ公儀
と問老成を中上ニ三ヶ月を須英の公使頻ニ上坂せんとするを延日を政
又を前ニ述るがき大名の甘言を以て都合ふる〻ハ俗右を申ふる不
都合ふ共を各国と兵端を開ハ発明ス武器も未ハ少く西洋ニ
大国ありて之を大国の兵士を年ニの戦場を経て新ニ発明ス武器
多くもれハ日本政府の未ハ西洋ニ献書する心ふきを必定の理ふり
既ニ條約書を為取習ス上を無ニ度を事叶ふ〻民且鎖港せんと
武備未ハ調ハ各国ハ使者を送を〻ス屠鎖港の諸者ニ及ふを各

國の政府敵てふ義引左まれハ戰爭の外他の策畧あるへからす依て
古昔より　貴國と災害ある者と申まゐり昨年之利大抵意況を含
て外國抗を妄に擬悔しる一件も遠に僅の軍艦を以而
恨を晴さんと欲せれ共　大君殿下の制止難黙止難し
單艦引上ひしより長防二國を攻擊し事を素より各國政府
の嚴令あり但　貴政府の主意よふ庚為め各軍艦を引上け
て長防を撃ん事を歩くり依て思ふに而錠外國条約の義に
付てふ惑抵萬と日本の事情を說示しかは英の公使人り日
と出帆延引說しに付最早待兼頻りに上坂せん事を申も
為し者人よりも大坂に到ふハ何ある事を申立ハ外又ハ外ある

海舟書屋

而業を說さんも難計れハ猶又英の公使と會議して某の意見を
說ハかに英の公使某と同意して何事も卒尔の挙動なき様堅く
約して既に横濱を出帆せんとせるの日阿部豊後守様松前伊
豆守様松平周防守様より書簡を得り就てハ此度推參
せしことを各様方と計り法事速に決斷致さん事を欲せ左も
れハ英の公使に說ふ考ふる挙動為政者義各様方格別に
内配意もふくに考力もふきに於てハ徐義某も英の公使と同意し
て不日京師に是非推参可致ハ併の公使五極の実情を以申進
きる条萬一條約の後に付　天子　大君と永く内同意ふかあ事に
於ても進て四公使上京の上推て　天子に可奉謁と公使者の

衆議を改め決せり素より於京師條約許容あらせらるれハ自然
各國の疑心も氷解して絶て交際上の親睦を得ん然る時は
近来新に發明しる武器戰爭の珍言奇術等も可傳授左も
れハ日本堅固強武の業も成り　貴國堅強せられハ國も得貴
國ふ恃貴ハ　天子及び政府も貴親てハ　大君
天子を貴ばんとしあつて　天子暫く各國の條約を為主
親許而交際の親睦を結ふ扨　貴政府より於て厚く尽力
肝要に可有之に亦暫く各國と親睦しあつ多年を経て
貴國実に堅強なるを可得為極て堅強なるの後を待公　一二の
外國の異論を排て　貴國人情に逆ひ為くも
貴國の強異りを発ばんとまると現ふ尽の而置改をもを期に及んて
大清帝の力充ちあハ各國の人心其時変に　貴國　天子を可奪又
可恐且　貴國の政治を蔑と称まるに或様度ふ忠の御を表ハ鎖港の
議論を立て且　天子ともに及ぶ事ハ開港の志を抱き養物長物の
如き者に英國人使者を送り英政府と熟議して右二ヶ國の中海道に可
出地を擇て一個の港を完成す事の情を顧ハせり然ハ可様ハ兵庫を速
に開港ら成英吉利政府の整念をも解しあ石志ある諸侯の邪謀を可挫
内不虞にして八影多くふ都合を可藤も熟計られハ此度蔑くも賢案の上
速に内閣議ふ為立度存上ハ特具謹言

慶應元乙丑年九月十九日

海舟書屋

此後同公使まゝ上言せる事あり云

條約中許容し難き條件有りと

古條約　新許さ大事件也　貴國新合國人心を安ずに付外も

外國多し長路を遠け西洋強を以て基本此に立たり

印百年来より逐次世界の形勢一変し帝國ここに初て新書を

貿易し人と交ふ是ふるも也を天より定めらる自然の道理にて五六

年来支那の好く古習を墮守し此支那の道を守ること慶去さんとする軍

ハ漸ふ相已兵禍を被る自禍を自招り依て此情事を明察せる

日本帝國各國の條約も　新許せられしハ此上あらず國の洪福と　帝の聰明ハ数年

海舟書屋

ふらに其効顕然たるべし

外臣レオン、ロセス區しの微力及ぶ丈を一心に寡衷を陳しかも

平生の愚悟に間作恐此度一大事件中上ハ

殿下萬り熟考を下ハ抜伏の事業変に出ハ

條約面にて各國公使元と日本都府に至留可被右を美國

支那にても同断の確定あり其故如何とあれハ公使と儀を固り

各國政府より其國と政府と主司に差出多る仕あれハ先ず

節を外臣公使等各政府と命令遠背に近けれハ其四討必

重し然れハ七ヶ月以前

大君殿下上坂市成時帰期を何時ぞ〳〵と少会ると未く漢

然共帰期を指示まる不能と述べり　殿下速に帰府ありて我
甚恐入の儀を不能止外臣口セス又各国公使と共に大坂又は京師に
内　殿下所留し地は是非速に出発し決心あり又軍艦并兵卒は
国々公使護衛し為連越しあるべき公使同様に何し地へも
引連可申存に貴国に内事国外臣に悍り敢て議論不致
ありて然るに貴国に事を平生深く心配致る処なれば作恐
今一条陳述仕上る
即今條約　勅許し初先叛臣毛利大膳を寛裕の由沙汰に
付しは何と云れば彼の罪を素より愚昧より出て大逆恐心なるに
非ず故に年を逐ひ段々事理を明悟し自然前非後悔し
朝に至る〻迄年各国政府より　大君殿下の伐長を殺すと
いへ共此度各国の政府能く日本帝国に事情を洞悉し第一
誘掖経営暴動なる者は大名と各国に事なれば政府於て更に
内心配なる可き敵なる可き成
殿下速に帰東し計を運し富国強兵の術に心を尽し海陸
に出軍備速に出懇貴国周海の備を行届しめ此度伐長に
費へき財用を前文軍備の用に充し左の儀を友朋に献
皆日本王を尊敬致し先此度を貴国独自ら誘大の心を
止め外国と信に親睦し彼に所長の長に問兵術を借り彼の得
る所を学ひ速に貴国の富強を計るべし

海舟書屋

諸藩と内外交を鍾ひ忌し専ら鎖攘と議を奏聞する事も
あると云へ傳義せり幸に聰明の心を照し古昔し迷路より起
宮廷各藩に萬り外國と唯今戰爭に及ふを以て外妄謀ふる
業を企力説得し為其教ふ後戰爭に後事まるの志ある
ハ各國敢て辱せ次速より力を試んと欲するなり
就ては速に　殿下江戸へ帰り改府し力を
皇帝の力を恢同し各國の志を屈し公使軍の再ひ振海に
赴き京畿に迫近する事勿らしむる様に取計ひ度
天し照臨を垂られる　大君殿下の洪福を祈る為め外臣
レオン、ロセス謹て申立る

海舟書屋

九月十一日　姜上

防長変異し後に付き第六
姜閣仕の通り條理順序を追ひ審し件し萬と紀聞と上支と
変事可仕る事存を利淺路吉川盛物大坂表に早し取次に振
中達の変事坂及延引に付自然為人を支ひて外来家并大様
家老せし内中合当月廿七日迄に参来遠出坂に振立之中
達に得せ今以て坂し移報も無し此上弥肯命に及ひて
最早寛容し取計も難仕に付き錦義旗旗を進之

罪状ハ紀可中ラ事存ハ尤兵機緊急ナル外萬ラ熟考シ
上遠慮ナシ様致ス可キ事存ハ此限
奏聞仕ル以上

九月　　家茂

言上ス趣ヲ聞食ス旨ハ賜ハ従長州一事ハ未決ハ市用シ
儀ナシニ付早速上京シ事業ヲ被　仰出ハ

同月廿八日薩藩大久保市蔵閣白殿下ニ美出ハ言ハ
此度兵庫表ヲ来着シ趣意柄詳ヲ義知ス仕ル旨

海舟書屋

阿部豊後ヲ枢松前伊豆ヲ枢ハ庶務ヲ上京港ヲ十日ヲ期限
ニ付ハ完ル　大樹家不日　市上洛ハ事件
奏聞ヲ為ス外ニ内シ義知仕ル就ハ兵庫表ヲ儀
帝都近ク殊ニ海内ヲ要港ニ素ヲ
勅許可ヲ為ス義ヲ
乎ハヲ為ス市勅シ内俊ヲ為ス様義仕ル二付ハ恐耶苦心
仕ル義ヲ無ヲ出ル様ハ自然俗ヲ立ル趣　市勅
市許容ヲ為ス
皇国ヲ存亡未曾有ヲ市国恥千載ハ取返ス期有ハ
実ニ人心ヲ向背ニ未拘美大ヲ市後難此一挙ヲ事存ハ二付

諸侯方急速帰国ニ赴成、速言ヲ　少名ハ上

皇威顕然ニ奮振有ル時度事存ハ尤ニて日間も未タ不役

ニ付強情ヲ張万一彼ヲ軽挙シ振舞ヒ候ハヾ速ニ出兵仰付度尤ハヾ幣邸当分人少ニて出兵ハ出来仕候ハヾ大隅ヲ

為ヲ中付ニ越セ出ル為ハ国家ハ出ル為ハ失錯ニ勤尽死力所存被

仰付度ハヾ少名ニ為ヲ下度此儀謹ニ申教ハ

様ニ役共中付ハ事

九月廿八日

十月朔日於大坂表

阿部豊後ヲ

松平伊豆ヲ

厳意シ越セ知ニ付官位ヲ名上ハ且国許ニハ謹慎

御沙汰可ニ待ハ越

御所ヲ仰出ハ候シ出役ハ免ヲ成ハ上所ハ不趣情

可ニ出ル

同日徳川玄同ヲ以関白殿下ニ差出ス書云

臣家茂幼弱不才之身ヲ以是迄叨ニ征夷ノ大任ヲ蒙リ

年ヲ及日夜勉励ニ出ル変内外多事ニ時ニ膺リ上

宸襟ヲ奉安下萬民ヲ鎮ムル能加ヘ国ヲ富シ兵ヲ

海舟書屋

強ひて　皇威を海外に輝しかんこと竟に職掌を汚し可
中ら痛心に堪へざる強弊開国五に外交臣家旋し内に
慶喜儀十年来　御下に在て事務を通達仕大任に堪
ずと申す存ぜに付臣家茂退隠慶喜に相続為仕政務お譲ん
旨臣家茂時に如し諸事御委任被成下度に付偏に幸
希上に尤当今時務し儀に付て以別紙　奏聞仕の間
古慶喜に　御沙汰ある迄に相幸願上
五十月朔日

臣家茂謹而宇内し形勢を熟考仕に支近来追し変

海舟書屋

遷流し和親を結ひ有無を通し互に富強を計に風習に
推移りに是天地自然し気数不得止し勢に可有し事
存に就ては　皇国に限り一向に外交ふを為支に可
尊慎退縮し姿に未成　中国幷中国戎共却て未立中
旨変既に先年下四に於て亜墨利加使節と和親条約
為取替未成に尤も右等閑敵し上遂　奏聞
御許容未成に儀に付以来追し鎖国し舊格を変し富
強し基漸に未に天に変し後外交拒絶し儀に仰出に付可
成丈
聖諭遵奉仕度志願に出に乃ち主謀し掃攘を唱る変

旨猶ホ仰出サレ度ク有シカバ何れも当国強兵ノ策ヲ立ル上
ハ多ク費ヤシ典ル難ケレトモ彼ノ不長ヲ採リ貿易
シ利ヲ以多ク船職ヲ設備シ以夷制夷ノ術ヲ講ル事
当今第一ノ急務ト考ヘ是迄ノ苦心ヲ主ル折柄防長
ノ事件モ起リ終ニ大坂城ヲ出張仕ル変ヲ料夷船兵庫
港ハ浪華條約シ席ヲ改ム
勅許有シト様ニ立ル臣家義ハ如何取計ヒ彼れ
閣下ニ表出ヲ可ニ立ト張様ノ論談ヲ尽シ應接仕
ル情ヲ何ノ多策諸ル仕出迚ヲ謀シ干戈ヲ動ルヲ必ス
利ヲ愛東假令一艘ヲ拵ヘ有ルトモ四方環海シ中国柄

海舟書屋

東西南北且ツ攻掠ヲ受ルヲ戰争ヲ已ム
皇国生民ノ糜爛此時ヨリ始ル不仁不義此上ヲ有ル為
誠ニ叡慮ヲ変ジ臣家義一家ノ存亡ヲ結ク事ヲ
寶祚ノ御安危ニ関係仕度ハ不容易儀ニ
陛下萬民ヲ覆育ノ[illegible]
[illegible]職掌ヲ立ル中ノ富強ヲ変ル　思召ヲ為ル下恐入
ロニ中勅旨ヲ[illegible]断然ト　帝卓見ヲ以為立何卒改ム條
約ニ付去冬存寛玉書ノ諸判仕ル儀判然ト
勅許ヲ成下ル様仕度尤ハ如何振ヲ尽力仕外ヲ外夷
制馭シ賓備ヲ立内ヲ防長追討シ功ヲ遂上

宸襟を奉安下萬民を安堵せしめ臣祖先し志を報い可
申志願に御座候　皇國如何様英武し御國に共萬一内
乱外寇一時に差湊西洋萬國を敵に引受候方と終に
聖神し御安危を拘り萬民塗炭し苦に陥りゆき必然し
後誠に以痛哭慨歎し極候も治國安民し任を荷い
職掌にあるべき行振御沙汰に堂々被仰付候何分も
孰恐事存に依て前文申上通速
勅許し御沙汰被成下候ハヽ
寶祚し長榮萬民し大幸長此上千し萬と奉懇願
誠に御堪悲歎弾泣し至事存に尤外夷

海舟書屋

閣下に取出り振出成候ハヽ速に事態入候後に付精し尽力遂法
判来る七日迄兵庫港を為差拒の習成丈早し御沙汰を成
下ハ様仕度此段奉　願ハ

同月二日於大坂城牡丹し間松平伯耆守演達

方今内外の事多し折柄
宸襟を不事安の次第柄も有し御職掌に於て御痛心し餘
御病痛の甚閣を為生に絶て一橋中納言殿永し京師に
て立し事務を其通に付中納言殿御相續御改務
御譲を遂し
御所に御願を為立に此段内意申達

和の振るゝ事

今般　御所に仰上し趣も有しに付明三日大坂表
御發途先伏見に立為入　御泊夫より東海道　還御一日の遊吉
仰出の事

同三日関白殿下より松平肥後守に尋し書付出候
大樹今般心願し趣有し変
御許容も無しの眼もふ賜何時出用可有しも勅平打柄自修
退坂帰府し存念候
天朝臣下し作法に有し為事こゝ　思召に依て帰府し候
内美止伏見滞留ゝ　仰出の明四日参　内為奈し始末詳に

自身一ヶ年　美の事

此程不料外国船兵庫港渡来條約し後改る
勅許有しの振中立為幕府於て取計無ゝ彼此
関下に表出無に一ヶ月立吉中張稼ゝ力を尽し意接仕表ゝ方を
為和の好ゝ何れも御許容無しゝ為ゝ退帆不仕去迚無謀に
外を飾しの得ゝ必係し利無美高候今一朝ゝ務等有しゝ
西洋諸国を敵に引受の財ゝ幕府し存亡ゝ姑く美玉後に
寶祚し御安危ゝも拘り萬民塗炭ゝ苦に陥り一ヶ中実以ゝ
容易候ゝ

海舟書屋

陛下萬民を覆育被遊ハ　帝仁德ハ古度り候ハ治國
安民ニ仕を荷ハ職務ニ御座候何ハ　帝沙汰出ハ施
行仕ハ義何多ハ勉忠ハ存ハ事ニ奴篤ニ　思ハ多分早ク
勅許ハ成下ハ様仕度ハ　尤ハ多ハ盡力仕外國拒退帰
仕ハ様取計可申奉存ハ

十月五日

小笠原壹岐守
松平越中守
松平肥後守
一橋中納言

飛鳥井中納言殿

海舟書屋

飛ニ宮中納言殿

同五日條約　勅許

此度兵庫ハ夷船渡来ニ付昨四日大樹ハ一橋中納言松平
肥後守小笠原壹岐守等ヲ以テ遠ク言上有ル儀夜ニ
入り諸藩ハ被為召　御諮問ニ変十二八九
御許容ニ可ハ無ク衆説暗合徹ニ不ル為得止別紙ニ通ス
仰出ハ事ト

條約ニ儀

御許容被為在ハ間至當ニ所置可被事ト

別紙之通り仰出され候間品々相談之上條約面品々相談之上
不應
厳意に付新に取調未伺申諸藩応接上申取極可申成
事
兵庫之儀も被止候事
十月四日夜　御所に被為召諸藩士左之通
松平修理大夫家来　大久保市蔵
内田仲之助
大樹に
井上大和
細川越中守家来　神山源左衛門
上田久兵衛
淺井新九郎
松平備前守家来　伊藤左兵衛
沢井宮兵衛
花房虎四郎
松平土佐守家来

海舟書屋

山田駿河

荒尾彌作

長多村喜三郎

津田斧太郎

有馬中務大輔家来

下村負二郎

久徳与十郎

松平因幡守家来

安達精一郎

松平紀伊守家来

海舟書屋

野村左兵衛

大野英馬

依田源次

外嶌機兵衛

上田傳次

廣嶋冨次郎

芝太一郎

松平越中守家来

岡本作三右衛門

森林弥一右衛門

三宅 弥三吉つ

立見 鑑二郎

高野一郎吉つ

松平美濃守家来

本郷 吉作

加賀中納言家来

里見 甚三郎

立花飛騨守家来

宮川 登三郎

蒔豊和泉守家来

海舟書屋

戸波 明次郎

沢井半九郎つ

松平越前守家来

小林 賢次郎

松平肥前守家来

長森 傳次郎

松平安藝守家来

熊谷 兵治

シャルセタ、ヘール、エキセルレンシー、アルセホルトメンに

（但英佛蘭同文言）

過日中より度々書翰を差遣其都度回答可及し候

我国事多端にて延引相成氣毒に思ひ居候

左にて述べ間可然了解なし様致度存候

一條約之儀吾　大君格別に尽力にて京師にて仰立別紙

之通申許容に相成候

一兵庫開港之儀は直に港都ロンドンに約定に

極る日限に開く様にと共萬一事情に依て早く開

きに節も可開哉し一件早速に総定に習我国より江戸

海舟書屋

表に申出下し関税金之儀三度目可納之約定之通日本十二月

可相納様申渡候し其外千八百六十四年十月廿二日之

條約之通取行可申候

一税改方之儀来細業議之上急速水野和泉守并

酒井飛騨守へ申渡江戸に於て精と議判の様為取計

可申候此度申入の趣旨是迄言

慶應元丑年十月七日

松平伯耆守花押

松平周防守花押

小笠原壹岐守花押

十月七日内達

臣家茂幼弱不才ニ身を以大任を蒙り内外多事ニ時ニ膺り
竟ニ職掌を汚し可申且近来拘痛衰閑ニ痞れ愛慈堪
大任奉存の為ならず
厳意ニ程を也不顧退隠し願書差出の事慈被及申沙汰
段被仰出何共當惑仕の素より決心仕の儀今更慈思正再
願仕度事存の通せ猶再三再四熟考仕の事是迄ニ不行
届ニ 申処ニ事ニ加ニ慈ニ及申沙汰ニ 罷命を蒙り感
激ニ餘病ニ推て出勤仕従前ニ非を改て日新ニ徳を修め
去浮虚存質実改道確然と れ立上安

海舟書屋

宸襟下保萬民の様仁不及勉励可仕奉存の依ニ謹ニ
申請奉申上ル

十月

同日伯耆守相渡

一今内外多事ニ世ニ膺り 申職掌慈の為立ニ忍を上迄来
内拘痛の衰閑の為立の ニ自ら退隠を遂度旨
申所ニ内願ニ為立の事慈に及 申沙汰候の作出の素
より 申決心ニ内後ニ自再度申願可に仰立の存ず猶再三
再四熟考の為立の事 拾別ニ 申罷命を以て

仰出ニ付 御感激シ餘誠意ヲ奮發シ勉励ヲ期シ
速ニ政務ヲ掌握可ラシム旨 御意ニ出ル事

十月七日

十月十日夜於大坂城
上意
先日東帰存立シ候不事シ変却ヲ従
御所尊蒙 勅命ニ事恐入畏ク已ニ 御請申上ニ付ヲモ
此上一際勉励為 皇國政務行届武備充実安

海舟書屋

宸襟ニ様致シ度存ニ間一同右ノ心得ヲ以愈可励忠勤
〃
同時於桜樹ノ間松平周防守演達
先日 御東帰可ラ遂ル旨ヲ聞ク変却ヲ
御自責ヲ遂ル後誠ニ以恐入ニ此上ヲ作ル及尚更ニ勉励
心力ヲ尽シ外ニ変ヲ各ニ於ヲモ尽抽精忠ヲ奉公可ラ致ニ
今度格別ニ 御寵命ヲ蒙ル為蒙 御請ヲ仰上ル旨ヲ
何ヲ不容易シ内壮義ニ付一旦中納言殿 御政務ヲ輔
翼シ後ヲ仰出別ヲ十分ニ助力ヲ尽シ旨ヲ仰出ニ
六ヶ敷中納言殿ニ仰出ル旨ヲ石以上以下ニ面々ニ可ラ

達

十月

私儀昨春中当地方守備総督ヲ仰付ル振海防禦指揮ス後ヲ仰付ル変何分多端シカ時勢此上ヲ急速要備ル所ニ見据モ之ナシ第一ニ帝ヲ手薄ニ後ヲ生ル而ハ恐入事存ル依テ前段振海防禦指揮ス後ヲ何分御免ヲ成下ル様仕度此段事預ル以上

十月

一橋中納言

将軍家ヨリ口上書

一橋中納言ヲ立ル書面ニ振ヲ出ス様ヲ振海防禦指揮可仕者ニシテ事存ル旨中納言預ル振ヲ御関白殿下ヨリ之ヲ書付

関白殿下ヨリ之ヲ書付

一内冬 内ニ儀昨日ハ 禁裏附ヲ出ル後少ク揮ス変ヲ当

不都合ニ付改ル一橋金津来名参 内ニ上ヲ出ル様可仕

事

一戸田家復封解慎一度ニ取計ル様可仕事

一対州ニ後不捨置取計ル様可仕事

一振海ニ後別紙ヲ免預ル方ヲ以ニ外ニ置此後幕

海舟書屋

商に於定り候一揆も御鎮り上候様成候ハヽ直様外藩取
出し人ハ仰付候ハヽ必定之者ゟ急大紛乱出来候故
右様之後風説ハ未ハ御ハ国ハ自然強可有之
事
下ヶ札
朝廷市安坂ゟ為ハ下坂前取手ハ様可被事
但摂海之後ハ実備出立仕組可申上ハ
同月
今度外国和兵庫表に渡来申立越何分切迫之次第ハ
海舟書屋

勢不得已後ハ有之外国條約
御許容之儀ハ願ハ仰立ハ趣ハ 聞食ハ自然ハ変ハ
可被者ハ 仰出ハ様ハ得ハ見込ハ可義ハ写先年ハ船ハ
條約書之内ハ天儀有之面之ハ妄様義可申ハ
者之越万石以上之面之ハ可申ハ船ハ
義ハ抄ハ
毛利大膳亮家并家老等之内ハ地ハ出ハ出来之趣
之件別紙人名之者ハ登せ申度上ハ使者申越ハ之書
仰出ハ期限ハ出ハ仕ハ共儀之件ハ先達申上ハ

無之ものゝ留其侭中坂為仕ハ尚委敷伺之上出地へ
差出遣ハ定役之者ハ之ハ助ハ中出仕ハ振ハ其ハ以上

十月　　松平安藝守

別紙

毛利大膳家老　　井原主計
宍戸備後助

右之通差出申ハ

松平安藝守ハ

海舟書屋

毛利大膳父子伏罪之変説紛念之廉之旨ハ右為ハ紀
大目付永井主水正ハ目付戸川鉄三郎松野孫八郎陸地
之地ハ之筋ハ留最前未達ハ通宗家并家老共之内早青兵
諸隊宮立ハ者三四人十一月を限り廣嶋表ハ差出ハ振大猶
ハ可ハ未達ハ者自然宗家并家老ハ同所ハ差出居ハ之
大目付ハ目付到着迄ハ可ハ差留遣ハ

十月

右之通十月廿七日於二条御城小笠原壱岐守ハ藝州
留守居ハ未達ハ変型之ハ八日藝州ハ追而来去ハ二日
毛利家老井原主計宍戸備後助廣嶋ハ差出直振

登坂可仕し変主計俊の快に付全快次第被出帰天保山
沖に可被出旨左人数百弐拾人斗名連被出り由中下伺に付
昨日し仰達面と嘸意如何相心得可然旨し旨相伺に変矢張
支の目付可差出の旨の書面し通取扱可申旨に差出すし
為参出坂被出り如何に付藩京詰し家老より海陸支
路へ急便を立候令兵庫通達被出り引返し相度旨支
の目付待合の相申出の由

十一月老中松平伯耆守を樓港に差向各国公使と面議すし也
右諸制し廉書左し通

海舟書屋

一外国和親し変正に成る事
一右変正に成る根本し公武の一和し事
一商法を厳格に成る事
一萬事誠実を本とし五ヶ公明正大に変革すべき事
一兵庫を鎖し別に代港の設ける事
一京師に居留地し願可差出事
一長崎へ出張の英し以外亟し次第外し儀も意に
公武の一和に出陳に成る変事
十一月十八日

今般江戸表へ伺上坂ヲ中ノ付当月九日國元出立ハ十二月ハ当
地ニ着仕候ハヽ其ヲ以ヲ持病ノ癇氣差起ニ付早速療養ヲ加可申
丈差急幾途可仕覺悟ニ付ハ古保養ヲ以ノ儀ヲ程能ク取
計呈ヲ下度手紙ヲ以上

十月十六日　宗戸備後助

開國起原巻四十七

海舟書屋